

### ■其三十四

下物は論無し、た**ニ**鮮けきを用ゐ、酒は定例あつて、必ず尊なるを酌む、島木が性情見ゆる待遇に、日方は**ニ**酔ひて面を染め、大胡座かいて座れる、軍服の怒れる肩、五分刈の大なる頭、次勢はまだ崩さず傲然として、葡萄酒の盞を手にしなから、親しきが中の打解け話におのづから催さるゝ歡びの色を浮べて、

『ア、快い心持だ、佳い酒だいつも葡萄酒とは贅澤な奴だ。

羽勝が斷つて來たのは残念だが、酒は好し、主人の汝も好い男兒だし、客の乃公も大丈夫だし、談話が面白いので小氣味よく酔つた。』

と云ひさして満足げに仰飲ぎ盡せば、島木は例の布袋顔して笑ひ、

『ハ、、、好い男兒たあり難えナ。だが乃公ア汝にやあ卑劣漢だと罵られて、撲られた事があつたぢやあ無えか。ハ、、汝の云ふことも當にやあならねえ、やつぱり相場同様で上げ下げがあるナ』

と打戯れたり。

『ハ、、直と何でも彼でも自分の道に牽強けるナ。イヤ時の相場ぢやあ無い、全くの事だ。全く汝は好い男兒だ、所謂好**ニ**だナ、快男兒だナ。』

『ハ、、大**ニ**風向が好いが奢らねえぜ。何でまた其様急に價が上つたのだ。』

「羽勝から聞いて皆知つたぞ。能く汝ア彼の馬鹿野郎の水野を自分の危かつた間際で世話を仕て遣つたナア。流石に島木は島木だ、好い氣象だ、と眞面目に感激して羽勝が話したぞ。

『ハ、、それで汝ア萬五郎に惚れたか。

『ン、惚れたナア、ハ、、。日方八郎も大に惚れ込んだぞ。

『嫌な野郎だナア、好かねえ奴だ。何程惚れやがつても振りつけて遣るぞ。』

『何故。』

『惚れやうが一體氣に食はねえから。

『フーン、そりやあ又何で。

「それが分らねえかえ、仕方が無えナア。後學のために記え

置きねえ、惚れるのに理由があるやうぢやあ眞物ぢやあ無えんだ。同じ此の萬五郎に惚れるならナア…。

『ウン。』

『乃公が悪い事を爲盡して、誰にも彼にも見放されてナ、溝ク中へでも蹴込まれたやうな時、萬ちやん萬ちやんツて云つて呉れるヤイ。左様したら其時ア此の萬ちやんも、些少ア惚れ返して遣るめえもんでも無えんだ。』

アツハ、ハ、甚い氣ニだナ、快人の快語だ。皮肉も其までになると爰矯が出て面白い。ア、愉快だ大笑ひに笑つたので馬鹿に酔つた。久しぶりで一ツ郎吟をやるぞ。

『宜からう。長い事汝の怒鳴るのも聞かなかつたナア。』

『蒲海の曉の霜は、馬の尾に凝り、』

葱山の夜の雪は、旌のし竿を撲つ。一  
ースト。』

『鯨が鳴くやうな馬鹿聲だナア、障子が破けるからもう堪忍して呉れ、此邊の奴あ目を廻さあ。しかも唐人のニ語で毫末も分ら無え。戦の詩の句かえ。』

『ウン其様なもんだ。』

『有るかいいよく、戦争は。』

『そんな事は乃公等よりは汝等相場師なんぞの方が却つて知つて居るといふことだぞ。』

如是云ひ終りし時日方は忽ち嚴然たる面色になりて

『いかなナア、此様な世態では。實にニ歎に堪へん。』

と正しく島木には語るならで獨り歎ぜしが、忽地にして氣をかへて、

『丈夫誓つて國に許す、憤腕復何か有らん、だ。少尉やそこらで物を思ふナア生意氣なんなのだ。』

と自ら寛くして打笑ひたり。

『時に島木。何様だ今から一緒に水野を訪はんか。實は羽勝が來たら君を誘つて、三人で尋ねて遣らうと思つて居たんだが。』

『フーム、萬一すると汝出征るのかな。』

『イヤまだ其は實際分らんが、出るやうになるにしても出ないにしても、此頃の水野の面色も見て遣りたいし、少し話を仕

いと思ふ事も有るから。』

『ぢやあ汝の剛直な其の氣に任せて手強い意見を仕やうと云二んだナ。』

「勿論だ。戀愛だなんぞといふ下らない事に、可惜水野を沈よせて置いて、知らん顔を仕て居ては友道が立たんと思ふ。諫にて諫めて彼の水野を、舊の水野に復らせるつもりだ。』

『そりやあ汝、人情は厚い行爲だが、智慧は足らねえ事だぜ。』

『ナニ。』

『マア下ら無えから止めたら宜からう。』

『なんだと。』

其三十五

島木は莞爾と笑ひながら酒を注ぎやりつ、

『また直に左様ムキになつて突掛つて來るよ。いくら酒の氣があるからといつて野暮な男だナ。』

何も決して怒るのぢやあ無い。しかし乃公が爲やうと思ふ二とを下らないとは何だ。智慧が足りても足らなくつても其は仕方が無い。黙つて知らん顔を仕ては居られんから尋ねやうと

ふのだ。其をた二一二に止めたら宜からうと云はれては面白し無い。何が下らない二、何故智慧が足らん二。』

『何故と云て、考へて見りやあ分る事だ。』

『いや分らん分らん、考へて見ても分らんに定つて居る。よら乃公の爲ることが智慧が足らんにしる、智慧が足らんために其効が無いのならば、汝が智慧を添へて効があるやうにして呉れても宜い譯では無いか。水野は乃公ばかりの朋友では無い、汝にも矢張朋友では無いか。朋友の道は何様するのが正當だ。互に氣に入るやうにばかり仕て居ればそれで可といふのか、そんな理窟がどこにあるものだ。勿論朋友の助け合ふのは知れた事だが、劍術を習へば竹刀に會釋無く引撲き合ふのが朋友の眞實だ、碁の一目、競射の一點に齒咬みを仕て争ひ合ふのも朋友の面白味だ。だから欺かぬ心も無くちやならん。競り合ふ氣も無くちやならん。まして眼に餘つたり腑に落ち無かつたりする事があれば、忠告も爲やうし、争ひも爲やうし、齒に衣被せず二り詈らうとも、互に他人の物笑ひには、させぬやうに、又なら

ぬやうにと、男兒を磨きあふのが朋友の甲斐では無いか。それを何だ汝の此頃の仕方は。た<sup>二</sup>水野の云ふ通りにばかり仕て與つて居る。そりやあ汝の<sup>二</sup>氣の振舞は乃公も感謝して居るが、それほどに水野の爲を思ふなら、何故一步進んで諫めては遣らんか、彼の男の迷を解いては造らんか、諫めても聽かずば何故争つては遣らん。士争友あれば令名に離れずといふ孝經の語を、たとひ其語を知らんでも其の理合に脉いやうな汝では無いが、何故汝は水野の争友にはなつてやらのだ。云は<sup>二</sup>汝は水野を愛して、鼻負に仕過ぎて間無つた事をさせて居るのだ。いや而を振つても左様で無いとは言はさん、見晴しでの汝の言葉といひ、羽勝から聞いた事實といひ、先刻からの汝の話し工合といひ、汝は水野の争友となつて、彼の男に過失無からしめてやらうといふ考は有たんで、却つて庇護ひ立をする氣味がある。其様な下らんことが何處にあるものか。

『オイ、大上段に振り被つて睨み廻すなあ其邊で措いて呉れへ下らなくつても乃公は構はねえ。汝の云ふ事位は乃公だつて知つてゐるが、諫めたつて争つたつて役に立たねえ事だから、乃公あ意見も云はずに打棄つて置くん。迷ふなく思ひ切れつて云つたつて、料簡方が煙管の羅宇のやうにすげかへが出来スものぢやあ無し、川柳が巧え事を云つて居らあナ、「極無理な音見魂魄入れ換ろ」つて。よく有る奴だが、いくら魂魄を入れ換ろつて云つたつて出来る相談じゃあ無え。しかし水野に意見をするなあ汝の勝手だ。止せと云つたなあ大に御世話だつた。芝で會つた時云つた通りだ。乃公は乃公だから乃公は行かねえ。汝は汝だから行くなら行くがいと。』

『よしツ、汝が行かしても乃公は行かなくつて。是から直に行つて諫めて遣る。熱誠を以て大に争つて遣る。憫然に、可惜好漢の水野を區々たる戀愛に悶死させて堪るもんか。日方は彼のために争友を以て任じて遣る。智慧の足らん男がする事の結果を見る。』

『ハ、、、乃公の云た事が氣に入らなかつたからつて激しちやあいけねえ。出かけるるなあ可いが其猛勢で行つて、水野と喧<sup>二</sup>をしあやあ汝いけねえぜ。彼の男もおとなしいけれど蟲持だか

ら。』

『ハ、しかし乃公の言ふ事を聴かなかつたら攫み挫ぐかも知れんぞ。』

「戯談ぢやあ無えぜ、人が眞面目で云つて居るのに。』

『大丈夫だ、日方は粗暴でもまさか喧嘩はせん。』

「いゝかい大將、屹度だぜ、釘をさしたぜ。」

『ウン、よしツ。時に島木、』

『何だ。』

『汝が平生飲んで居る此の葡萄酒は中々佳いプ。』

『それほどぢやあ無いがマア飲めるよ。』

『手土産に仕て持つて行つて、久しぶりで水野と談しながら飲むのだ。些細な御用だ、二本ばかり徴發するぞ。』

『ハ、、、他の物を徴發して土産にするたあ此奴あ蟲がいと。』

可い〜。持つて行け、今縛らせう。』

其三十六

牽牛花の花の色は去年と今年と同じく咲かず、人の心の傾きは昨日に今日の變るが常ながら、水野は過ぎし日の日アより、如何にかしけん今までの水野にはあらずなりて、た■世にありふれたる爺婆の無智無學なるものゝ如くなりつ、ひたすらに御佛を頼み奉り、日に〜我が勤務を終るや否や、直に淺草に走り行きて、本尊の御前に祈念を凝らし、いつはり無き心の誠を融けつくして、さて後やうやく寓に歸るを常習とするに至りたり今日は日曜に當りて身に閑暇あれば、お濱の何時もながらに説怪みて其の美しき眉を霸むるをば背後に見棄てつ、水野は正午過ぐる頃に家を立出でたり。

吉右衛門は本家に相談事ありとて招かれて去り、お濱一人餘令無く新刊の雑誌を讀みながら、お鍋を相手に留守し居るところへ、

山路。ウン此家だナ。』

と名札を讀んで獨語つやがてに、胴魔聲の人を驚かすほど恐るしく大く、

『頼む。』

と一ト聲呼ばはれるものあり。

『誰か呼ばはつたでがす。』

『さうだネ、お前出て御覽ナ。』

お濱は猶雑誌をば讀みつ<sup>二</sup>け居しが、應對の模様は明らかに聞ゆ。

『水野は居る。』

「今ア居ねえでがす。』

『何處へ行つた。』

『知りましねえ。』

『しかし出たものならいづれ歸るだらう。』

『どうでがすかサ。』

『遠方わぎく來たものだから上つて待つて居やう。』

『いかねえでがす。待つせえお前様。』

お鍋は慌てゝ入り來りて、

『いやに身體の魁偉い尊大の野郎でがす。水野さんの事聞くから不在だつて云つたら、上つて待たうと吐します。どうして呉れますべい。イヤな奴でがす。』

と云へば、お濱は、辛く雑誌より目を離して笑ひ出し、

『分らないねえお前は、言葉の様子ぢやあ水野さんと仲の好は御朋友らしいぢや無いか。どれ妾が行つて見やう。』

と立出でたり。

見れば客は血氣壯盛の陸軍士官にして、頭顱大く肩厚きさまは素人づくねの土人形などの如く、無骨一遍の正直さうな人なり。

『水野さんは今御不在ですが誰様でいらつしやいますり。』

言葉無く名刺を出して客の渡すを、お濱は手に取りて讀みて急に笑顔になりぬ。未だ面をこそ對せざりつれ、水野の友に其人あるよしの日方八郎といふ名は、かねて聞き馴れて何時と無ノ疏からず覺え居たればなり。

『たしか島木さんやなんぞと御一緒の、御同國の方でいらつ<sup>二</sup>やいましたね。』

一應念を推すお濱をば、日方は眼を正しくして一寸見しが、<sup>二</sup>訝かるべくも無き處女の、た<sup>二</sup>恰<sup>二</sup>なるべく見ゆるのみの清らなる娘なれば、

『其通り。』

と甚明らかに答へたり。

『水野さんは淺草まで御いになつたのですから、御退屈でも御待ちなさるならば、此方へ御通りなすつて。』

何時かお濱の背後に出で來り居しお鍋はそつと袖を引きて

『宜いですがエ其様な事を仕て、何だか蟲の好かねえ厭な奴でがすよ。』

と心配し過して小聲に止むるを、お濱は顧みず日方を案内して水野の室に通したり。

日方は水野が机の横にどつかりと座りて、

『ハ、ア何も裝飾は無いが悪くない部屋だナ。相變らず有るものは書籍ばかりで、長物の無いところは流石に感心だ

と先づ評する時、お濱はお鍋が汲み來りし茶を鷹むれば、

「君は此家の娘さんかナ。どうだ水野は。此頃も相變らず勉強か。』

と話し仕度さに打解けて問ふを、水野くと呼びつけにするが小面ニくてか、

『ハイ。』

と僅々一句に答を切りて、

『御自由においでなすつて。』

と言ひ棄てしまゝ、ニと次の間に出でニ唐紙ぴつしやり、お鍋の後を追ふて茶の室に退けば、お鍋は、手の甲を口にあてニ笑ひながら、

『女を呼ばるのに君だなんて、ホ、ハ、。』

と、げらつきて已まず。お濱も睨む眞似して叱りは叱りながら、おのれも口のあたりに笑を浮かめぬ。

話亂無き所在無きの餘り、日方は其邊を見廻しつ、机の上に在りし折本に偶然目を着けて、手に取りて何心なく披き見しが、忽ち其所に抛り出し。

「何だ、普門品ニ。何だ是あ何だニ。御有難連の誦むものではないか。まさか水野が信心するのではあるまいが、如是なものが机に載つて居るのは何様した馬鹿な事だ。

と其處に罵るべき人にてもあるが如くに罵つたり。

待てどもく、水野は歸らぬなり、此家の者は彼方に退きて音にさせぬなり、日方はほとく身を持餘して、四圍の書などを手あたりまかせに拙き出しては読み散らし居しが、それにも忽ち倦きて無聊に堪へかね、小齋の靜坐には更に慣はぬ身の、何をがな消閑の具にと見回す折しも、携へ來し二飼の酒に眼の止まれば先づ微笑を浮め、

『仕方が無い、これでも飲んで待つて居て遣らう。』

と口にくそ言はぬ心に思ひて、

『オイ、君。オイオイ、君…。』

と呼び立てたり。

『ハ、、、また君イ君イつて呼ばつて居るでがす、妾が君イになつて出て行きますべいか。』

『ホ、、、いよよ、妾が行つて見るから。』

お濱は立つて客の前に到れば、

『此酒を飲つて居ながら待たうと思ふのだ。栓抜きと洋盞とを假して呉れたまへ。』  
と酒<sup>ニ</sup>を指さしながらの無邪氣の言なり。

『ハイ、洋盞はありました、栓抜きが…。』

とお濱の一寸行詰りしも無理ならず、誰も洋酒など用ゐるもの無き温厚者揃ひの、此家は特に隱居處の事とて當世の人の出入もおのづから少きより、事少き村住居の簡素に馴れて、今日の今まで栓抜きに用も無かりしほどなれば、貸さんと欲して其物無きに困じ暗踏へるり。

お鍋を隣家に走らしめんか、隣家はた<sup>ニ</sup>の小前なれば、猶さ。松拔などの有るべくもあらず、さらば本家に至らしめんか、本家と此家との餘り隔りたり、如何せん、とお濱は少時迷ひたしたが、ふと水野が洋小刀に栓抜きの添ひ居しを思ひ出し、先づお鍋を呼びて小き盆に洋盞を載せて持來たらしめ、おのれは机の周圍、本箱の上などを見つ、彼の心當の小刀をと尋ね搜したり。

されど小刀は外に出で居らずして、終に見當る事無かりしかば、若や此内にと、机の下なる手箱を引出して、日頃の心易立に何の氣も無く<sup>ニ</sup>撈れば、書簡、雜記帳、物書きさしたる反故なん



どの底の方より洋小刀は出でたり。

『や、栓抜きは此品で澤山だ。何だか面白いものが出さうな師だナ。どれ退屈紛らしに見てやらうか。』

日方は眼快く■に彼の小刀を取りて、猶また其匣の内の物を見んとすれば、

『およしなさいよ、他人さんの物を。貴下は亂暴子。』

と窘むるが如き口氣に強く云ひ懲して、お濱は直に匣の蓋を閉ぢ、机の下深く押入れつ、無遠慮も程度のあるものと腹立もて、あどけ無き顔にも瞋を含んで其處を退きたり。

もとより年もゆかぬお濱などには眼も呉れざる日方は、手酌の無興氣に一盃一盃を重ねしが、飲んではいよく相手欲しさに獨居の淋しく、所在無きの餘りのわざくれに、前に見し手匠を我が前近く引寄せ、内なる雜記帳様のものを取出して、此頃■野が如何なる事をか書けると、其を知りたきばかりの好奇心に隔無き中とて無遠慮にも、一盃仰いでは一葉翻し、一枚讀みては一杯仰いで、終に我知らず酔に入りぬ。

冊子は何くれと無く水野が讀み過ぎしたる或は國書或は漢籍、或は洋書の其中より、我が意に適したる語、詩句、事實なん、を、或は原のまゝに、或は引直して、筆任せに記したる眞實の雜抄にて、恰も人の摘み集めし花のいろ／＼の線に貫かれたスを見るが如く趣味あるものなれば、日方は心窃に水野が苦學を怠らぬを悦びながら讀み居しが、讀む事半途にして間に分まり居し一片の紙の偶然飛び出でたれば、何ならんと急に手に取りて見るに、第七番凶といふ觀音の御籤な。

さいかんナ。何様も怪しいナ、此様なものが出るとは。机のトには普門品がある、こゝには此様なものが介つてゐる。何様したのだらう、何だが怪しいナ。』

されど怪しき事は介まり居し其のみにして、冊子の三分の一ほどは猶白紙の物も書かれず残れるなり。これまでと日方は其の冊子を伏せ棄てゝ、盃を嘲みて物を案じ居しが、見るとも無しに見れば冊子の後の表紙には、反故染といふものゝ如くに、落習の上に落書重なりて、縦横斜角に何か書されたり。何事を加是は落書したりしやと、讀み易きを辿りて一トつ■きを讀めば

此は是一首の歌にして、  
立ちて居る方便も知らに我が心天つ空なり地は踏めども  
とありたり。

『フ、ーン、精くは分らんが戀の歌だナ。水野が詠んだのか知らん。ウン彼のだらう。も一ツは何だ、ン、是も歌かナ。ナニ。天地に少し至らぬ大丈夫と思ひし我や雄心も無き

ハ、ア、舊は絶大な抱負も有つた身だがと、戀に迷つた今を白ら悲む歌だナ。ア、佳い歌だ、乃公にも解る。天地にも多くは劣るまいと思つて居た此の我身だがなあと、戀の苦しさに萎れて、呻き出した此の歌の主の腹ん中が憫然でならん。此方に書いてあるのは何だ。何だと。

大丈夫のさとき心も今は無し戀の奴と我は宛ぬべし

ア、いかんく、怪しからん事だ、馬鹿々々しい。散らして書いてある此の讀みにくいのは何だ。

久堅のあまみづ

エート、

久堅の天みつ空に照れる日の失せなん日こそ我が戀止まめ

いかんナ、いかんナ、斯様恐ろしく思ひ込んでは始末が着かん  
斯様滅茶苦茶になつては實にいかん、大馬鹿野郎だ、戀愛狂だ。

此方にては日方が夢中になつて酔に乗じて如是罵れる時、彼にてはお濱が悦びに冴ゆる聲して、

『マア遅かつたのネエ、大變に待つてたは。それにアノ日方んといふ人が來て待つてよ。』

と忙しげに言へば、同じく聊か疾辯に、

『左様かエ、觀音様であのお龍つていふ人にひよつくり逢つてあの人の朋友だとか云ふ立派な婦人と二人に無理に強ひられて御馳走になつたりなんぞ仕たものだから、大に歸りが遅くないて仕舞つた。日方は一時間も前から待つて居てかエ。

と、水野が語る聲の爲たり。

好まぬ酒を人に強ひられて、水野は■に醒めたれども三分の酔あり、好める酒を一人汲みて、日方は猶足らずとすれども七分の酔あり。た■さへ酔へる同士は打解け易きに、まして是はト方ならぬ中の舊友の、たまさかに相逢へるなれば、笑顔に云

ひ出されし、

『ヤ

』ヤ』

の一ト聲より先づ碎け合ひて、

『其後久しく會はなかつたナア。』

『ほんとに長い事會はなかつたナ。』

『ウン、乃公が候補生になつた時祝して呉れた會で會つた限りだつたナア。』

『ア、左様だつた。早いものでもう大分過去になつた。

と互に懐かしげに凝然と面を見合ひしが、水野が目には日方が肥え肉づきていよく男兒らしく立派になれるが、羨ましく二また好ましく見え、日方が眼には水野が二せ窶れて往時の生々としたる氣合の失せたるが、情無くもまた口惜く見えたり。

『日方。久しいと云つても僅見無い中に、君はまあ實に立派な好い身體になつたナア。

『乃公は其様なに云はれるほどでもないが、水野、汝はまた、大ニニせ枯びて年を取つたナア。』

主人も客も共に一種の言ひ難き感に打たれしが、日方は猿臂を伸ばして水野の手を執り、

『この骨つばいニせ切つた此手が、相撲取りを仕ては随分手ひどく乃公を投げつけた事もある脅力のあつた手だらうか。此の様子では今では乃公には、中々敵ふどころではありは仕まいが。』と云へば云はれたる水野は歎じて、

『ア、今ぢやあ一ト堪りも無く負かされて仕舞はう。これほど衰へて居るとは自分でも思は無かつたが、君のがつしりと仕た手と斯様比べては、羞かしいやうな心持が仕て、物悲しい淋しい感じがする。』

と蔽すところも無く思ふまゝを打出したり。お濱は小娘の智慧の乏しけれど心ばかりの饗應に、お鍋と相談して、干魚を焼きて裂きたると漬物とを、酒の下物にと案じ出して持來りて歸りしが、日方はそれにも心づかぬ如く、

『左様だらう、定めし左様いふ感じが仕やう。舊と異つたとは乃公ばかりでも無い。汝は羽勝にもまだ會ふまいが、彼も鐵の

やうな男兒に自分を鍛ひ上げて、料簡にも言語にも身體つきも、弛緩けたところの無い確問漢になつて來たぞ。もともとからト風ある男だつたが、いよく實が入つて物になつた。今に目る、何か遣り始めて、生命さへ有りやあ屹度遣り遂げるは。島木が金を出して船を買つて、遠洋漁業を爲るとか何とか云つて居るから、いづれ着々と歩を進めて居るのだらう。今日も實は島木のところで羽勝と乃公と、三人落合つて此家へ來る筈だつたが、羽勝に差支があつて斷つて來たので、島木は出ないと云ふし仕方が無いから、そこで乃公一人で出て來たのだが……水野ツ、久しぶりで會つて顔を見ると直と、面白く無い事を云ひ出すやうだけれど、猿が物を含んで溜めて居るやうに、思つた事を口の内にまごつかせては居られない乃公だ。汝の俊寛くさい血の氣の足らん其面つきを見、狗骨樹の皮をニいたやうに瘡せつこけ切つた此様な手を見ては、云はずには居られん、堪忍が出來ん、汝のために云ひ出さずには居られん。厭でも應でも聞いて貰はねばならん。日方は汝に苦いことを云はうためにわざ／＼此家へ來たのだ。さあ確乎として熟く聞いて呉れ水野。』

と居丈高になつて聲色激しく説き出したり。

### 其三十九

かつて島木が我に告げし言によりて、日方が今何を云はんとするかを水野は猜し知れるるなり。

我を思ひ呉るゝ朋友の眞情より、我が變に惱めるをは愚なりメして、説き醒まし呉れんとする其人に對ひては、そも／＼如何なる言葉をもて應ふべきぞや。辯解すべき事にもあらず、また本より云ひニくべき事にもあらねば、慎みて聞くよりほかの車は無かるべし。されど人の言葉を聞きて思ひ止まることの叶はどならば、世に戀に悶ゆるものは一人も無くて、他人に云はるゝまでもあらず先づ我と吾が分別に、よしなき惑は思ひ斷ス「きを、諦めても諦めても諦められぬにこそ生命の縮むをも忘れ人の謗をも顧みで悩み苦みはするなれ。それを如何に朋友は眞の情より道理せめて云ひ諭されたりとて、口には思ひ斷えりとも云はニ云ふべし、心より全く改むる事の何として成る

き。た**二**他人の親切にて言ひ呉るゝ事は、よしや少しは無理なる廉ありとも受くべきが道なれば、水野は頭を垂れ肩を窄めて黙々と、雨に濡れたる鶏の如く力無げに、悄然と日方の云ふところをば聞かんとしたり。

日方は水野がしほらしき此態を見てあはれを催し、新にまた葡萄酒の栓を抜きて、水野が座の横に何時か置かれたる酒盞に注ぎ與りつ。

『しかしまあ其様な堅くならんでも宜いは水野。一杯飲つて呉れ、わぎく持つて來たのだ。久しぶりで汝と一緒に飲らうと思つて、島木のところから徴發して來たのだ。何も左様危**二**つて貰はんでも宜い、汝と乃公との中ぢや無いか。乃公はサーベル三昧、汝は書籍三昧、たづさはる道が異ふので姑く遠かへたが、幾年か前は一ツに居て、醉眠秋被を共にし、手を携へて日に同行すといふ古い詩の句の通りを其儘の境界だナアと、ソレ笑ひ合つた事も有つた中だもの、遠慮も斟酌も有らう筈は無**い**。さあ左様いふ中だによつて黙つては居られんで、言語に額も付けず露骨に云ふ、水野「汝は何で情無い魔に憑かれた」。

我々の中で年は若い**が**、聰明で慾が寡くて學問が好で、立派な學者か詩仙かにならうよりほかには爲りやうも無いと思つて居た汝が、此頃の墮落の仕方は何といふ情無い態だ。隠してもはかん悉皆知つて居る。其の顔の憔悴は何からの事だ。其の自體の枯稿は何故の枯稿だ。惘然に其様なひがいすな身體になつて何が出來やう。眼に見えるところさへ其通りだもの、まして心の弱りは何程だらうと思ひ遣られて、汝のために**二**が出る、口惜くなる、腹が立つ。それも此も時の災人の爲の故でもあればこそ、汝の一心の据ゑやうが悪くて、高の知れた一婦人に氣を取られたからとは、平生の汝にも似合はん愚な事では無**い**か。婦女が何だ。戀が何だ。たとひ美女だらうが賢女だし

フが、我を迷はせりやあ我の仇敵だ。男兒の正氣になつて働か**フ**といふ事業の、障襖になる奴あ悉皆仇敵だ。戀たあ料簡の**二**みへ出る黴だ、閑暇な馬鹿野郎の掌の中の玩弄物だ。世間一體の風とは云ひながら、新聞を見ても書籍を見ても、戀だ董だ雌た百合だと、女臭いことばかり流行つて居て、まるで明治の若

い奴は、戀をするために此の世の中へ生れて來たので、希望  
事業も無いものゝやうだが、水野「汝まで其風に感染れたとは  
何たる事だ」。南風が吹きやあ北へ貼然、又北風が吹きやあ南  
へ貼然する、平々凡々の草のやうに、自ら立つて居る事が出来  
ないとは見下げた奴だナ。其様な腰の無い奴では無かつたが、  
汝も一世の風潮には捲き倒されない男兒らしい男兒になりか  
ねて、波に随ひ浪を逐ふ意氣地無しなつた。

#### 其四十

『水野、よもや汝はまだ自分で云つた事を忘れるほどに耄碌は  
爲まい。數年前に我々が寄り合つて、互に抱負を述べて談笑  
た時、大丈夫の身をもつて詩文の小技に身を委ねやうとは何の  
事だ、雖蟲篆刻壯夫は爲さずと、楊雄づれでさへ云つて居るの  
に、歌のポエムのと<sup>二</sup>ぬ返して、食へもせず衣られもせぬもの  
に苦勞しやうとは、道樂過ぎて餘り詰らぬと、乃公が口を極め  
て非難したらば、今と異つて元氣のあつた其頃の汝は、眉を<sup>二</sup>  
げ面を正くして凜然と答へた其の挨拶に何と云つたよ。食は自  
の糧、詩は心の糧、衣は<sup>二</sup>さ寒さに對して人の身を護り、詩は  
悲みにも怒りにも對つて人の心を調へる、それを盆の無いもの  
のやうに云ふは淺ましい誤謬。貝に眞珠あり、人に詩あり、詩  
歌を除きて人の作れるものに、野菊の花の一輪だけの美しさの  
あるものも無く、阿房威陽は羞しく醜い。美しき胸の働きの目  
にも見えぬが、凝つて詩となつて文字に現るれば、讀むもの恍  
惚として我を忘れて、作る人が泣けば泣き、憤れば憤る。され  
は人間の性情を敦くし、世の氣風を嘉くするもの、詩に越すま  
のは無い。大言のやうだが此の水野は、た<sup>二</sup>蝶花のおもしろさや  
月露のあはれさを歌つてのみ我が一生を過さんとは仕ない。百  
年千年にして一ト度出づる大詩人の、一代の人心を新にして、  
萬世に天意の眞を傳へんとする、其は及ばざる願にもせよ、時  
勢の幫間となつて徳を頌するやうな賤しい意は微塵も有たない。  
長い眼で見て居て呉れたまへ、此の水野はたとひ世に背いても  
世と争つても、屹度血もある<sup>二</sup>もある詩を作つて、聖代に生れ  
合はせた男兒一人だけの、任務は其で果すつもりだと、さも潔  
よく言つたでは無いか。其の意氣は今何處へ無くした。其の

言葉は**三**忘れ果てたか。ヤイ水野。詩の一篇も作らうといふものが、現在の人情世態に眼は離すまいが、今の日本の状態を何様思ふ二汝。今の世界の状態を何様おもふ二汝。浪のヤたない海も無ければ、風の荒れない空も無くつて、國は國と競り合ひ、人種は人種と鬭ふ、世界の浪風は轟々として、我が**二**の濱へも磯へも寄せて來て居るでは無いか。それだのに國內の状進は何様だ。武士道は廢り儒教は棄てられ、舊い教は壞れ果てたが、眞面目に受け入れられた新しい教も無く、過去帳を讀むやうに哲人の名ばかりは忙しく呼立てられて、やがて直片端から忘れて行かれる。社會に善惡の目安が無いから、勝手**二**第の強いもの勝、智慧で争ふ、言説で争ふ、筆で争ふ、金で争ふ、しかし道理で争つたのを聞いた事が無い。金を欲しがると、權威を欲しがると、名を欲しがると、肉慾の満足を欲しがると、しかし徳を欲しがるとは藥に仕度も無い。坊主が役立たん、新聞記者が頼もしく無い、教育家が下らん、學者は學説の桂庵ばかりで、文學者は春枝さん靜枝さんの御機嫌取りに過ぎん。世間一體は全で不調子で、錢のある時はハイカラになり、錢の無い時は僅カラ、忤は戀愛論、親父は料理談、滔々として一般の趣味は日に墮落して居る。想つても恐ろしい世界のありさま、**二**るさへ嫌な人情の調子、彼と此とを思ひ合はせれば、此の無骨不風流の乃公でさへも、無限の感**二**に打たれて、詩のやうなもの一が呻き出したくなる、まして汝が感**二**の無いわけは有るまいに何故一片耿々たる神州男兒の丹心から、國を愛し世を憂ふるの誠を披瀝して、詩でも文章でも作り出して呉れぬ二。手緩い事では無い、今の今でも國運を賭して戦争を始めれば、さしでめ乃公たちは水火の中にも飛びこまねばならぬ時に逼つて居る場合だ。しかし詩は興一が發しないと云へばそれまでの事、出来んなら出来んで是非は無いが、汝までが世の風に負けて戀愛騒ぎをするとは何事だ。そんな柔弱な、性根の抜けた事で、何の詩も歌もあつたものか。時勢の幫間とならぬと云つた其の意氣は今どこに在る二。正しく汝は時勢の幫間となつた、奴隸となつた、狗となつた。男子の眞の心を失つた。男心も無い白痴になつたナ。戀の奴と我は死ぬべしとは何たる事だ。此の普門

品は誰が誦んで、其の下らん御籤といふものは誰が抽つた。ちらりと聞けば観音詣して、而して纔と今歸つて來たのだナ。汝が思つて居る女が大病だとかいふ島木の談話も思ひ合はせて、すつかり汝の所業は分つたが、女のために經を誦んだり、御籤を取つたり、わざ／＼淺草まで歩を運んだりして居るのだナ。エーツ情無くも衰へに衰へた奴だ。書も讀み理にも昧からぬ水野ともあるものが、如何に迷へばとて一婦人のために、それだけでも愚になつて、成りきつたか。魔に憑かれたか何に憑かれたか、全然正氣の沙汰では無いが、男兒の魂魄が少許でもあれば、正氣に返れ、正氣に仕てやらう。目を覺ませ水野。』  
と云ひさまに、普門品を右手に驚握みにして、左手に水野を取つて引伏せ、

『情無い奴だ。正氣に返らんか、朋友の情誼だ、身に染みて受ける。』

とビシリ／＼と續けさまに打つたり。

其四十一

苟くも男兒なり、辱しめられて怒を發さるはあらず、特に主面こそ柔和なれ、心の底には王侯貴人をも重くは視ぬほどの水野の、如何に朋友の好意よりの振舞とは云へ、物も云はさず到手於く打擲かれては、勃然として胸に衝き上るものゝ無きならねば、我が襟を捉へし日方の手を、急にぢ放して身を退きつ、嚴然居すまひを正して眼つき嶮しく無言に見返しゝが、あゝ思へば今我こゝに何をか言はん、まことや我は往時の我ならず、比べて明らかに知るゝ身體の衰へに、心の衰へも自ら知ると(まさかに一旦懐きし本來の志を、忘れ果てゝ好いと思ふやうな氣は持たねども、正直を云へば何時の間にか、空に物をのみ思ふ癖のつきて、自分の心にも自分の心が何様もならぬといふ情無い身の上、これではならぬと思ひ返しても、思ひ返す其下より其人の事ばかりが思はれて、茫然として日を暮らして仕舞ふ<sup>ニ</sup>かしい境界。むかしは若い氣勢に神も佛も頼まざりしが、信ぜずには居られなくなつて今は信ずる此の我が舉動を、他より見たらば、成程意氣地の無い愚夫愚婦の所爲と、譏られても罵られても仕方は無く、云ひ解かうに云ひ解かうところも無し。



されば打たれても擲かれても罵られても、男兒らしく顔を擡げて云ひ争はうには、餘りに云ひ甲斐無くも思ひに弱れる我な  
あゝ我ながら情無くも情無し。せめて他に打換かれて憤を發して、思ひ切る事の叶ふほどの淺き戀ならば、此の頼もしき我が友の情誼に、打つてく／＼脊骨首骨の碎くるほど打つて貰はんを打たれても擲かれても我が心の、死に近き馬のやうに動かぬが情無い。打たれ辱しめられたが悲しくも無く、打たれて云ひ抗ふことの出来ないのも悲しくは無いが、た<sup>二</sup>物も云はず怒りもせず凝然と仕て居て人に打たれたぎり、吾が迷を棄てやう思を忘れやうといふ意が、何處からも出て來ぬほどに愚にも思ひこんだ自分が悲しい情無い。』と擡げし頭を何時かまた下げ、一度肩を聳かしたる身の復崩折るれば、其の様子を見て取りて日方はいよく／＼齒痒がりイ

『エ、男兒らしくも無い、其面は何だ。身を退いて眼を瞬つて乃公を見た時は、水野汝もまだ話せると思つたが、やがて直に力の<sup>二</sup>けた泣きつ面になつて、<sup>二</sup>ぐんで俯いたのあ、ア、<sup>二</sup>くるしいは。なるほど大丈夫のさとき心も今は無いだらう、其の状態ぢやあ懸の奴と死ぬのも遠くもあるまい。汝は戀の奴となつて死ぬのが本望か知らんが、氣の毒だが左様は乃公が死なさん。ヤイ水野、日方はいたづらに怒罵暴行はせん、た<sup>二</sup>大切の一人の朋友の爲にナ。才を惜み名を惜んで遣ればこそ争ふのだ。乃公の大切の朋友の水野何某を、一婦人に迷つて戀に死ふだとは笑はさん。とても汝が戀に死ぬほどならば、此の日方八郎が打殺して遣る。汝は羽勝の會へも出て來なかつたほど、<sup>二</sup>友には薄く戀に厚くつても、乃公は朋友には厚くする、戀に關はん。父母の名も顯さんで戀に死なうとは不孝な奴だ、國民の義務も碌に果さんで戀に死なうとは不義な奴だ、生を此世に受けた甲斐も残さんで空しく死なうとは卑劣きはまる。』身勝手ばかりの穀潰しとは戀に死ぬやうな白痴た奴の事だ。才を惜んで及ばん以上は名を惜んでやる。汝を不孝不義卑劣な殺造しとは呼ばさん、戀には死なせん、打殺すが何様だ。  
と激語は口より出づるに任せて、ふたゝび水野を引据ゑて打たんとする時、隔の襖はすらりと明きて、春の燕と身も軽く、ひ

らりと躍り入つたるお濱は、**二**然に日方の拳に取りつき、是はと迷ひ疑ふ間に、早くも其手より普門品を奪つて、口惜しさ**二**さ取り交せて籠むる力の有らん限りに、日方の五分苜頭をびしやくくと打つたり。

#### 其四十二

犬坊丸に鞭撻たれたる曾我の五郎を今様にして見るごとき日方は且驚き且呆れて、眼を圓くして我を打つものを何者と茲と睨めば、夕日か**二**やく緋櫻と燃え立つ顔して、匂やかなる眉を早り美しき眼を蹟らせたるお濱は、其時日方の面上を望んで普門品を抛ち棄て、物言ふも可厭と云はぬばかりに**二**と後向き、身を翻へして倒るゝが如く水野の膝に**二**伏し、忽ち堰き上げく

**二**の聲になつて、

『エ、口惜しいく、あんまり口惜しいー。こんな酔漢の亂星人に、何故黙つて打たれて居無くてはいけないの。何故打**二**してやらないの。だから観音様なんぞ信心するのはをかしいと云つて妾が止めたのに、先生が餘り夢中になるもんだから、人に馬鹿にされて此様な目に會ふやうになつたのよ。それも入んな五十子さんが悪いお蔭よ、あゝ口惜しい。妾が口借しつて仕方が無いから、こんな酔漢の無茶な人なんか、早く妾の家から逐ひ出して遣つてよ先生。ほんとに**二**らしい厭な奴がつちや無い。エ、何故先生は黙つてばかり居るの、黙つてたやあ妾厭よ、怒つてよ、怒つてよ、怒り出して頂戴よ、エ、口惜しい。』

と身を揉んで悶ゆる其の八ツ口より襦袢の袖の紅色こぼれて、低く伏したる背中つきのすらりと優しきもいとほらしく、それを中にして對ひ坐せる**二**の水野、肥えたる日方、揉みくちやにされて捨てられたる普門品、倒されたる葡萄酒の空洋盞すべで是亂れたる一場の景色ながら、描かば描くべき風情あり。水野は黙して石の如く語らず、思はぬものに出られて日方は困じたる時、お鍋は先刻より彼方にて人と應接し居たりしが、終に此處へと一人の男を導き來れり。

『オ、羽勝か。』

『ア、羽勝君か。』

日方と水野とが同時に聲かくるを、眞面目に受けながら、いつも變らぬ洋服姿の羽勝は靜に坐して、

『日方、君はいかんど。今此家の婢に仔細を聞いたは。島木に釘をさされて居ながら、何をするのだ、いかんど何様もー

小野、久しく逢はなかつたナア。しかし君も無事、僕も無事

で、お互に満足だ。實は今日日方と約束して、島木と三人で君を尋ねる筈だったが、僕は身體が忙がしかつたので斷りを出したところが、思ひのほか早く身體が明いたので、島木のところへ行つて見ると、日方は一人で此方への事だ。島木は何か商素上の推算に身を入れて居る様子で、誘つても氣の無い返辭をするやうになつて居るし、そこで一人で後を追つて遣つて來たが、ひよつとすると日方が言葉に募つて暴な事でも仕はせぬかと思つた通りに、來て見ると果して亂暴の所爲だ。然しまあ僕に免じて赦して呉れたまへ、何も惡氣では爲ん日方だから。■う僕が來た上は暴はさせせん、三人で快く靜に話さう。水野、君は今でも甘い黨の方だらう。小兒欺しだが舶來菓子を少し持つて來た。此邊には珍しからうと思つて、枕絹とかバタカツフとかいふ奴を持つて來たが、舟人の酒を強く好かん奴は菓■に趣味を有つ癖が出るのをかしいことだ。さあ日方は飲むなら飲め、此方は茶で談さう。』

と常には似ず勉めて口數きゝて、白けきつたる此坐を黒めんとすれば、お濱は竊と其人を覗ひ見て、正しげなる此の新來の客に、泣顔見せん事を憂くおもひてや、面を蔽して逃ぐるが如ノに此處を去つたり。

#### 其四十三

島木の胸潤くして能く人情に通ぜるといひ、日方の心剛にして飽まで義理に仗らんとするといひ、其他山瀬といひ檜井といひいづれも我に取りてはおろかならぬ友なが、わけて誰にも彼にも優りて我が親しく語らひて、眞の兄とも頼み思へるは此の羽勝なり。其性質の我に似通ひたるところのあるが爲にや、世にいふ合性といふ事の爲にや、た■しは眞實前の世に如何なス因縁のありての事か、他に超えて世話になりなれつしたる恩義の關係は島木に及ばず、一ツ窓の光を各自の机に分つて、な

文を共に賞し疑義を相質す學問の交りは山瀬に如かざりしか  
も、た何と無く我彼を他ならず懐しめば、彼もまた我を他た  
らず愛して、分桃の痴れたる情こそは有らざりけれ、斷金のま  
ことの契は淺からざりしなり。

されど人おのく望む處を異にすれば、彼は一帆の風に萬里の  
海を渡つて波瀾洶湧の中に身を托するの船人となり、我は半夜  
の燈に幾卷の書と對して寂寞たる小齋の裏に思を鍊るの學究ち  
るを甘んぜるより、相見ざる月日はおのづと多くなり行きしが、  
しかも相思ふ心は更に變らず、彼海上にありと知る時は、風の  
曉、雪の夕、あゝ羽勝はと此方に思はぬ折も無ければ、富士の  
高根も浪に消えて夢ならでは日本の見えぬ異郷の津に在りても  
彼方も我を猶思ひ呉れて、他邦の港を目の前に見る繪葉書の、  
此岬の下此の水の上に汝の友の羽勝在りと、村居の閑なる机の  
上に、天の一方より温き情を寄せ呉るゝこと數となりき。

我とはかくの如き中なる羽勝が久しぶりにて歸りしを迎ふる。

會に、一篇の歌をも寄すること無く、數句の語をも交ふるこ  
無くして、全く面を出さざりしは、水野の胸濟まず思へると

るなりしが、其の事彼の事の煩累に心を取られて、其後も思ひ  
ながら尋ねさへせざりし其の羽勝に、忽然として尋ね寄られて  
は、あゝ此人を尋ねでは濟まざりしものを、差當りての苦き  
もひにのみ惹かされて、我に疎き意の露ありてにはあらねど

おのづから人の情を空にしたるやうになりし悲しさ、と其懐  
き顔を一ト目見るより早く、何より先に我が振舞の勝手過ぎた  
るが羞しくなりて、正しくは對ひ見る事も叶はぬやうの心地し  
つ、沼々として日方の我を諫めくれたる其の幾千言を聞けるト  
りも、我と我が果敢無き戀に迷ひて、此の情の寫く義の強き尊  
むべき友に負きたる罪の輕からぬをおぼえ、よし無き想にのみ  
沈める昨日今日の我が愚しきをば自ら慚ぢ自ら責むるの情は燈  
くが如くに起りて、嗚呼我心裏に物無くして懐しき此の友と今  
こゝに相語らば、如何ばかり今日の團藥の嬉しく樂しからんを、  
彼方は相も變らず胸を開きて物語れど、我は人には告げ難き私  
情を胸に抱き居りて、往時の無邪氣の我ならねば、隔つる氣の  
更にあるにはあらねど、水と油との一つになりがたきやうに、

何處と無く奥底なくは打解け難き心地して、言葉に餘る思はありながらも、所以知らず自然と我が口の結ばるゝを何とせんと、水野は私に自ら苦めり。

見れば日方の言ひしに露差はず、生來の沈毅の氣性は浮世に鉛はれて、いよく萎まず怯れぬ大丈夫となりたるは、其の額には曇の絶えて無くて、眼には鋭さの加はりたるにも知られ、眞峯なれども舉動に威ありおちつきあり、平易なれども言葉に思慮あり斟酌あるに、あだには月日を経ざりしを示したり。

水野に水野の所思あれば、羽勝にも羽勝の所思ありて、累々メして喪家の狗のごとく衰へ果てたる我が友の容態をば、しばし無言にして羽勝は眺めしが、た<sup>二</sup>日方のみは思つては言はずに居ず、一旦は羽勝を憚りて默せしが、堪へ兼ねてか忽ちまた

『水野、』

と一ト聲呼びかけたり。

其四十四

お濱は何處にか去つて復現れず、むくつけき田舎女のお鍋は茲をもて來りしが、先づ無作法に人々の顔を見渡して、初に羽勝か前に一盞を薦め、次に水野が前にまた一盞を置き、茶は注<sup>二</sup>て其の盞を満たしながら日方が前には取りても與らず。

『汝様は勝手に取つて飲まつせえ。』

と云はぬばかりの顔つきしつ、其邊の亂れたるを取片付けて黙つて退き去れば、水野は氣の毒さに堪へずして、自ら茶盞を取つて日方に與へたり。

日方は此等の瑣事には頓着もせず、感<sup>二</sup>に堪へぬ面の色、解盟れる眼には露をさへ宿して、

『水野』。もう乃公は一ト通り云ひ盡したから繰り返してまお言ふのでは無いが、如何に心が弱つたればとて、何といふ汝の按へ方だ。迷ふなら迷ふで仕方は無いやうなものゝ、同じ当ひにもそれぐゝがあらう。何故迷ふにしても男兒らしくは迷はぬ。汝の衰へに衰へ果てゝ女の腐つたのゝやうに成り果てわぬのが、何より彼より情無い。汝は本より剛強な鐵石の男といふのでは無かつたが、外面は柔かでも事によつては、人と争つて後へは決して退かぬ、怖い氣合を含んだ奴で、醜い醋のやう

なところがあると、平生乃公が評したほどの男兒であつたが今  
は何様だ。醋なら醋は腐つて仕舞つたのか、黷びて仕舞つたのか、  
乃公に打たれて抵抗もせぬやうになつたとは嗚呼情無い。、  
れ眼を開いて天地を見る。畫工には畫を教へぬ草木も無い、  
男兒を磨かうといふものには我が精神を奮はせて歩を進ます趣  
や刺馬輪で無いものは無い。見なかつたか旨目漢し、氣が注  
かんか放心漢、此家の小娘が何を仕たぞ。齡はたつた十五  
十六かで、乃公の一ト攫にも足らぬ優しい身體、それでも流石  
に日本の女だ、平生一ツ家に居る汝が、乃公に撲たれ辱められ  
るのを見ては然として、身を挺んで汝を護つて乃公に當に  
あの愛らしい美しい眼から、寶石のやうな光を輝かして、眞紅  
な顔に血を沸して打つてかゝつたでは無いか。女性だ、小日  
た、屠弱い娘だ。それでさへ一旦激動すれば、此の日方にも取  
つてかゝる、それが貴い人間の勇氣だ、人の人たる所以を支へ  
るものだ。それなのに何だ汝の其の態は。一少女にも及ばな  
くなつて、た崩折れて萎れきつて居る。よく彼の娘に對し  
ても慚死せぬナ。水野、汝は決して決して本心を失ふやうな  
其様な腑甲斐無い奴では無いが、何様すれば此様なに意氣地ぶ  
無くなつた。こゝの娘の舉動を眼の前に見て、よく汝は自分が  
羞しくないナ。一少女でさへ彼の通りだ、汝は堂々たる男兒で  
無いか、乃公は彼の娘に頭を撲たれたが、汝は精神に鞭を受は  
なかつたか。苟くも舊の水野であるならば、人一倍物を思ふ  
の事だもの、必ず感奮せずには居らぬ筈だが、衰へ果て弱り果  
てた今の汝は、矢張り首を例るゝばかりか。此家の娘の健氣な  
振舞と、汝の其の萎れきつた状態とを、見比べ思ひ比べると此  
の日方は、これほどまでに汝は衰へたかと、汝の衰へ果てた  
が悲しくて出る。女にも劣るやうになつたとは餘り情舞  
い。何故迷ふにしても男兒らしく迷つて呉れぬ。

#### 其四十五

『心を一婦人に苦むる汝を見るのも忌々しいが、勇を一少女に  
遜る汝の腑甲斐なさを見ては、あゝ凡骨では無かつた水野某が  
如是も衰へたものかと口惜くなる。島木の言つたことが異寧  
ならば、此の日方は全然否認するけれど、そりや或は戀愛に

陥るのも已むを得んことか知らんが、何故戀愛に陥つたら陥つたで男兒らしくはせんり。同じ迷に陥つても、人にも告げず物を思つて空しく泣き悶えて居るばかりが道でもあるまい。いたづらに遲疑躊躇して、何等の措置をも取ることを敢てせぬのは大丈夫の最も慚ぶるところだ。たとひ少々は其の所爲宜きを失つても、慮つて、斷じて、行つて、着々と事情の展開に應じ行くのが、男子の敢てすべき道では無いか。猶豫して決せざつは、軍務では何よりも甚じく惡むところだが、獨り軍人のみだ左様覺悟すべきでは無い、何人に取つても遲疑聯躇ほど、其んを害するものはあるまい。同じ婦人に愛着するなら、水野汝も男兒では無いか、何故男らしく行動せぬ。ピスマークは何様して其の妻を得た。烈しく思つた、明らかに求めた、而して終に得たといふに過ぎん事ではないか。今は其の夫人も世を夫られたが、我が陸軍大將の某侯が、年も若く身も鄙かつた時の戀の物語は、虚實は知らぬが汝も知つて居やう。徒然を慰めスばかりに讀んだ雜書に、文覺の事を記してあつたが、彼を見て先夜も汝の上を、自然と胸に思ひ浮めた。文覺は全く失敗し、ピスマークや我が大將は思ひを遂げたが、其の遲疑躊躇して空に物を思はぬは同じ事だ、飽まで男兒らしく戀をしたのは同じ事だ、世の小説にあるやうに女々しく月日を経ぬのは同じ事だ。彼の文覺が云つた言に、戀には人の死なぬものは、と苦しい思を白状してゐるかが、水野、汝も其の衰へかた其の窶れかたでは、成程汝も死兼ねない様子だ。とても其程に迷つたならば、何故男兒らしく進んでは振舞はぬ。黙つて物を思つても死ぬなら、何故成敗生死此の一擲と、男兒らしく運命の何を與ふかを見ぬ。文覺はた我慢ばかりの男では無い、袈裟を其の後では、辰の刻より未の刻まで、四時と云へば八時間だ其の八時間を大聲揚げて、荒くれた眼から霰のやうな落ながら泣き通したとある、恐しい情の深い烈な奴だ。其位の奴が手荒い事をするまでには、一ト通りや二タ通りで無く物を思つたらうが、歸するところ暴でも何でも男兒らしく思ふまに振舞つたのはまた已むを得ん。とてもかくても物を思つて穩に死兼ねますまいならば、何故男兒らしくは振舞はぬ。當

つて碎くか碎けるかだ、**二**貫して倒さるゝか倒すかの事だ、首離ると雖も身懲りず、といふ勢で**二**貫して仕舞へ。汝が良い婦人を得て大將になるか、た**二**し文覺のやうな狂僧になるかそれは何方になつても乃公は關はんが、何様せ汝は欲が薄く高慢が強い、變挺な男に生れて居るのだから、坊主になつて仕舞ふのも寧宜らう、日方は貧乏でも汝が左様なつたら、麻の衣位は寄進して立過して遣る。汝が衰へに衰へて、一少女にも其の勇氣が及ばんやうになつて變に死ぬのを、見殺しにするハは乃公には出来ぬ。男兒らしく振舞へ、女ではあるまい。高が一婦人を對敵にして、遠距離で彈藥を使ひ盡すのは愚な事だいつそ一と思に**二**貫して仕舞へ。勝つか負けるかの他には物は有りは仕無い。遠地から敵に勝たうといふのは贅澤な詮義だ。羽勝も乃公の言ふことを無理とは思ふまい、何様だ水野汝は何と思ふり。女々しい事は宜い加**二**に止める。もう乃公は此限り物は言はぬ、これだけ言つても乃公の云ふ事を用ゐんならば、舊の水野になり返るまでは、汝には會はん。』

#### 其四十六

日方の言ふところも無理ばかりにはあらず、思ふて言はざる苦さに堪へかねては、兎せん角せんと思ひ切つたる事を何故とも無く做し出あらねど、おのづからに思ひ切つたる事を何故とも無く做し出しかねて、女々しと云は**二**女々しと云はるべく今日までは過せるなり。されど差當つて今日方に對つて、其の言葉に従ふべら意見に就くべしとも云ひかねて、水野は何とも言はねば、羽勝は徐々に口を開きて、言葉づかひも重々しく、

『水野、黙して仕舞つてはいかん。日方の言は或は不當だ、しかし日方の意は親切に他ならんのだ。其言を採ると探らんとは別として、其親切は十分に受け納れねばならん。無論君は日方の好意に對して感謝して居るだらうナ。

と優しく水野を誘ひて言はせんとすれど、水野はた**二**偽ならぬ眼色して打點頭きて、然り、と答へたるばかりなり。

「人は人各々の性質がある、境遇がある。深く他人の事に立**二**るのは僕は取らん。日方の親切は僕も有つて居る。たゞし日方の如く自分の意思感情を、君の上に押し被せやうとは僕は能に



に。水野歸つて來てから君の評判をいろ／＼聞いた。僕は二へた。考慮を練つた。而して君に對して贈るべき或物を得た。しかし今の君に對して何を贈つても無益に終るべきを知つた。よつて君に對して何をも言ふまいと思つた。しかし今日方の言つたところは不幸にして、僕が考へて云はうと思つたところと止反對の言であるので、已むを得ず誘ひ出されて一言いふ。ロ方の言を駁するのでは無い。もとより僕が言はんと欲して居たところなのだ。水野、君は聰明の人だ、僕等は及ばん。た三、此の世の中に立交つて、人に接し事に應ずるに於ては齡の多はだけに、僕は私に思ふに君に對しても、必ず一日の長があると信ずる。僕は書を讀んで理を尋ねたで無い、事に當つて自ら知つたのだ。僕は人に使はれた。人を使つた。而して人と人との間の感情といふものが、如何に大切なものであるかといふことを身に染みて覺えた。而して我が感情に任すことの危害を實驗した。僕は愚であつたから同じ過失を二度した。三度した。四度した五度した。幾十度と無く實驗した。而して後纔に我が二備を調御することの如何に大切なものであるかといふ事を知へた。罵られるれば怒る、氣に入れば愛する。それは欺かぬ感情である。其の感情に任せて喜怒するを天真爛二だなんぞといふ。一船の中で事端を生ずるのは、何時でも天真爛二の人だ。怒スには怒る理由がある。愛するには愛する理由がある。しかし感情ばかりが最上なものでは無い。感情に任すのを是とする人は船員の中の最も危険な人だ。自分の感情を調御しなければ、自分は人に使はれることが出来ぬ。自分の感情を調御しなければ、自分は人を使ふことが出来ぬ。自分の感情を調御しなければ、自分は人に交ることが出来ぬ。人に使はれず、人を使はず、人に交らずに濟む世間は無い。僕は僕だけの小な経験だが、しかし確實堅固な経験から、非常に強く深く感情の調御が人世の最大必要のものであるといふことを確信して居る。君は聰明絶倫な人だが、此の點の経験は或は薄からう。戀愛も是非がない苦悶も已むを得ぬ。一切の事は謝せんとして謝せぬが天命だ。風の前面から吹く日もある。潮流の横へと行く夜もある。颯風も龍巻も起る日は起る。しかし其間に立つて屹然として、我が

正當の處置を取つて行けば死して餘りあるのだ。水野。君が君の欺かぬ感情のために死にたくば其迄の事だ。しかし君が君として世に立たうとした大丈夫の志を忘れぬ限りは、君は君の感情を調御することを忘れてはならぬ。必ず感情の調御といふことを忘れずに居て欲しい。君が文覺の如き人とならんことは、僕の最も恐れて居るところだ。文覺の如きは僕の蛇蝎視する人だ。しかし僕と日方とは言は異にして意は同じだ。たまやま日方の言に僕の胸裏に觸れたところが一寸あつたので、言はずともそのことを饒舌つたが、二人の言の異るところを忘れて其の意の同じところをさへ取つて呉れれば、日方も僕も何程**二**ばう。』

#### 其四十七

羽勝が同情のいと厚くして、而も道理の正きに據れる、其の言には力あり、其の意には仁有るに、分けて此頃は感じ易くない水野の、心の中に深くも恩を謝しながら、言はれしことの本末を思ひ味ふ時、羽勝は復び口を開きて、

『僕の言は或は漠然として、捉へどころの無いやうにも思へる。しかし僕は漠然たることは決して云はぬ。手を下すところの知れぬ教訓は僕は嫌ふ。着手するところが分明で無ければ實務は擧らぬ。收穫の算用を播種の前に爲るのは最も忌むところだ。た**二**感情の訓練と云つても、着手のところを云はねば空言になる。煩いか知らんが空言にならぬやうに、適切に敢て君のために云はう。云ひ過ぎて無禮であつても免し玉へ。たとへば人を思ふとすれば、其の情は胸中に鬱滞して結ばれる。また例へば人を怒るとすれば、其の情は心頭に狂ひ立つて已まぬ。それを其儘に任せて置けば、我が本分の事は其れがために誤られる。船夫が思ひも寄らぬ過失をして、不測の**二**害を得る其の多くは、胸中に職務以外の何物か**二**まつて、職務に安心して居る時に起る。又一船の平和の破壊は激烈の感情の暴發に基く。そこで自分が自分の當直時間だけ、甲板に在つて執務する間は何等の私情が胸中に在らうとも、それを壓へつけて放肆ならしめぬやうに敢てせねばならぬ。親を思ふは孝子の眞情だ。しし病んで居る親を思つて茫然としたため、船の進路を過つて洲

へ上げたでは濟まぬ。職務を執つて居る其間だけは、如何に差子でも自ら忍んで、親を思ふ情に氣を取られぬやうに、嚴然に胸中を清潔にせねばならぬ。湧き上り起り立つ感情を抑制せばならぬ。訓練して我が命令に服させねばならぬ。これは實務に身を練るものゝ必ず知つて居るところだ。日方なども必ず経験して居るところだ。たゞ世に一種の人があつて、おのづかし感情の訓練を敢てせぬ履歴を有して居る。僕に云はせれば其んは最も不幸な人だ。直言すれば、水野、君が其人だ。君は美しい感情を有して居て、今までは訓練を要する事がなかつた、みれほど美しい感情を有して居たのだ。その上、感情の訓練の必要を感じる如き職務に身を置かなかつたのだ。そこで感情の訓練の履歴を有して居ぬ、それは慥に大に君を苦めるのだ。感情は馬だ。鋭い感情を有して居る人は駿馬に乗つて居る人だ。馬は愈訓練せねばならぬ。然も無ければ、乗つて居るものは危い目にあふ。水野、君は生來駿馬に乗つて居る人だ。而して今其の駿馬は無法に走り出して居るのでは無いか。谷に陥るか崖から墜つるか、淵へ躍り込むか前途が知れぬ。僕等は傍から見て冷汗を流して、非常に寒心して居るのだ。善く御さなければ危険は目の前だ。どうか訓練を敢て爲て呉れたまへ。馬のわめの人では無い、人のための馬だ。馬は人の命令に服させて、叩して其の能力を盡させた時、はじめて駿馬の責ぶべきが知るので。文覺の如きは馬術をも心掛けずして、一生荒馬に乗へて無法に驅けて、終には撥ね落されて死んだのに過ぎん。僕等は駕馬に乗つて居るものだ。君は幸に駿馬に乗つて居る人だくれぐれも云ふ人のための馬だ(馬のための人で無い。どうか善く鋭い感情を御して、而して君の千萬里を馳驟するところを見せて呉れたまへ。駿馬のために谷に陥り淵に落つる不幸を目せて呉れたまふな。』

＝

『可矣。確言動かすべからずだ。羽勝の言だけある。此馬に臨んで久しく敵無し、人と一心にして大功を成すといふ、句の、彼の人と一心といふ四字が響き渡つて、今更強く面白く＝

じられる。水野、馬をして我が意に従はしめなければならんぞ。』

と傍よりまた言葉を添へたり。

#### 其四十八

日方が手荒き舉動といひ、羽勝が物固き言葉といひ、皆これ淺いらず我を思ひ呉るゝ朋友の情の眞實なりとおもふに、水野は泣かぬばかりの面つきとなつて、血の氣も失せたるやうの兩の  
■には、勢無き心の淋しさを現はし、露ばかりも動かざる眼の中は、一念の沈みきつて一ト處に凝れる状態を示す如く、や、少時は物をさへ云ひ兼ねたりしが、やがて感激に堪へ得ずしてや、さしぐむ■に聲も弱々と、

『あゝ有難い、實に謝する、一君の厚意は決して忘れぬ。

特に羽勝君の教は心魂に徹して、愚鈍の僕にもよく解つた。君等の親切に激勵まされて、出来ないまでも僕は自ら勉めて過たぬやうにする。感情の訓練といふ事も屹度敢てする。不幸に■し力が足らなくつて、轉んでも倒れても溪に落ちても、轉べば起上る、倒るれば立つ、溪に落ちても屹度這ひ上つて、目ざところまで必ず行かうといふ氣ばかりは、何様あつても屹度忘れぬつもりだ。僕に生命の有らん限りは、一日に一日だけ此の心を懷いて、苦んでも悶えても生存へやうと思ふ、此の僕の眞の意を汲んで呉れて、何様か僕を見放さずに居て呉れたまへ。丑長く此の僕に君等の友たる幸福を得させて置いて呉れたまへ。丑等は皆優しく教へて呉れるし、自分でも氣が付いて居るし、自ら克たうとしたり自ら憤つたり、自ら争つたり自ら闘つたり心の中の揉めぬ日も無く、力も根も使ひ盡して今日まで來たが何と無く行末が物怖しくて、知りつゝ高い崖から深い淵に陥スやうな時が有はせぬかと思ふ。必ずく其様なことにはならない様に、君等の厚意を空しくせぬやうにと、一生懸命に思つては居るが、萬一萬々一左様いふ目にあつても、屹度それきりにはならぬつもり、其點を水野だと見て呉れて、あれほど諭したのに云ひ甲斐の無い、とうく深みへ落ちた馬鹿な奴だと、爪拜きして棄てるやうなことを爲て呉れたまふな。餘り愚な事いふやうだが、た■何と無く僕の前途に恐ろしい不幸が手を撫

げて、僕の行くのを待つて居るやうに思へる。何様も左様思へてならんので、それで如是なことも言ひ出すのだが、何様體り間違つても本來の一心は、君等に對しても決して忘れぬ、其處をた■水野だと思つて交際つて呉れたまへ。人の運命の明日は分らぬが、君等の厚意は夢の間も忘れぬ。君等に負かぬやうにとは屹度努力する。』

と、心に張りのあるさまは猶見えながら、意氣は振はずして誰鍾と言ふ其の哀れなる様子を日方は見過しかね、

『なに、何と無く行末が怖しくつて、不幸の運命が待つて居るやうに思へるつて。何其様なことが有つて堪るものか。我々の行末は皆輝いて居る。我々七人の行末に暗黒は無いのた(我が日本國民の前途には暗黒は無いのだ。燃える火の前に暗黒が有るかい。暗黒はた■過ぎた昨日の事。生きて居る人間、燃えて居る火の、其前に暗黒が有るとは誰が言ふ。そんな事を思ふのは氣の迷ひだ。悉皆汝の衰弱からだ。しつかり爲なくてはいかんぞ水野。喇叭が進めと鳴りやあ敵はもう無いんだ。大丈夫の向つて行くところには不幸も何も無い。下らんことをいつてまだ撲られたいか。羽勝の言に従つて努力して日を送れ。汝の前途の多幸なのは乃公が受合ふ。』

と壯語の有る限りを盡して氣を引立てたる其時室外に人の氣色して、忽ち間の襖は右左に大きく開かれたり。

#### 其四十九

壽長ければ智慧多し。吉右衛門は眼に世の人のそれぐを見覺えて、水野を今に稀なる若者と悦び、初はた■高田の依頼にりて寄寓を許したるに過ぎざりしが、後には其の品行を見、其の人となりを知つて、之を重んずることは主の如く、之を思ふことは子の如く、他人あしらひにはせずして月日を過し來れス程なれば、今本家より歸り來りて、水野が許に訪ひ寄れる人々の、いづれも表面ばかりの友にはあらずして、水野のために■は諫め或は諭す其の一片を、ちらくくと耳に入るゝにつけ、紫には日方といへるが如何に振舞ひて、また我が孫のお濱が日左に對して如何に振舞ひしかをも聞きて知るにつけ、た■其のままにはあり得ぬ心地して、不自由なる田合の心には任せねど

お濱お鍋に指揮して酒肴を調へしめ、水野が命令の無きにも關らず、其座に其を持出さしめたり。老人の親切なる心より、出頃の水野の舉動を愛ひ居し矢先に、我が心を得たる二人の客の物語をば、一ト方ならず嬉しく思へる餘りなるべし。

何の馳走も無き饗應なれど、膳を配らせながら吉右衛門は笑るつ、

『どなだも邊鄙のところへ好く御來臨なさいました、私は此定の老夫でございますが、此の兀げたところをでも今後御覺え願ひます。島木さんには御心易く願つて居ります、折角諸君が  
■

來臨下すつたのですから、

と云ひかけて一寸水野を見て、  
『お差圖も伺ひませんでした、御談話の紫ぎのためばかりに一獻あげるやうに致しました。田舎の事ですから何もございませぬ。おまけに飲酒家の無い家の事でございますから、御惣府みたやうなものばかりで、氣取も何もございせんが、まあ何も御笑ひ草になすつて飲つて下さいませ。日方さんへは御謝野の印と申ししても宜いので、孫めが飛んだ失禮を致しましが、何様か御勘辨下さいませ、其代り澤山御酌をさせますから、ハ、ハ、これお濱こゝへ來て御謝罪を仕ろ。』

と云へば、其の背後に小くなり居しお濱は、面を染めて是非無く頭を下げんとす。日方は老父の言を心地快げに聞き居しが

『ハ、ハ、君、なに、謝罪らんでも可いさ。お濱さんといふかね、好い氣象の娘さんだ。日方八郎生れて初めて頭へ手を上げられたが、打たれて怒るところではない、全然感心した。日本の婦女は誰も彼も、お濱さんのやうな氣合で居て欲しい。偉い娘さんだ、好い氣象だ。祖父さんに何か云はれたつて頭なんか下げてはいかん。其代り御酌は御遠慮無しに願はう。ハ、ハ、』と無邪氣に制し止めたり。

『左様仰あつて下されば先づ老夫も助かります。何様か御機擔好く御談しなすつて。兀頭は古風物で時代違ひですから、御若い方の中では氣が退けてなりません。御免蒙りますから御寛にと。』

『イヤ左様で無い。君は中々話せる。いゝぢや無いか老翁、

ここに居たまへナ。』

『ハ、有り難うございますが萬一何様な事でもか叱られました、若し御卷骨を頂戴しますと、兀頭は特別に利きますからナ。まあ引退つて居る方が無難でございます。ハ、、、イヤこれは冗談を、失禮いたしました。』

吉右衛門は終に彼方へ去れば、日方は羽勝と相見て笑つて

『好い老夫だナア。如何にも奇麗な軽い調子で、そして親切に満ちて居る、透徹るやうな人だナ。』

『左様だ。まだ我々の及ばんところがある。』  
と評し合つて楽しげに酒盞を擧げたり。

『ハ、、、乃公ぐらゐ能く飲む奴はあるまい。何だか老人が出て來たので甚く氣が和いで、何程でも悠然と飲めさうなやうな心持になつて來た。』

其五十

言はねども花あれば野は自から春なり。あどけ無きお濱一人の交りたるに一座は和ぎて、理屈を離るれば談話に角無く、笑藤漸く起れば酒の味饒く、謹嚴の羽勝、沈鬱せる水野さへ、何時か六七年の往時に復りて、心は若く氣は易く語らへば、まして日方は興に入りて、羽勝の斥けたる天真爛二、醉態淋漓として受けては飲み受けては飲み、

『島木、馬鹿野郎、一緒に來れば宜いのに。金儲に忙しがつおつて何になるものか。』

と幾度か繰り返して罵つては、又餘念も無く二人を相手に談笠して盃を手にしたたり。

『お濱さん、その色の黒い眞面目老夫の羽勝に飲ませて遣つて呉れたまへ。コラ羽勝、飲まんかい、水野の妹の酌だ。ハ

ハ船では成るべく酒を用ゐん習慣を付けて居るから飲めんなぞといふのは虚言だらう。船員は大抵善く飲むといふぞ。

『イヤもういかん。虚言では無い、船では成るべく用ゐんやうにして居るのだ。執務の不確實になる基だから飲酒は忌む。二これは海員の精神の進歩した趨勢で、古來の海員の飲酒に耽つれ悪習を洗ふ任は我々の肩にあるのだ。だから實際僕などは餘り用ゐん。しかし非常な暴風雨の時、襯衣まで濡れ浸りながら困

苦極まる勞働を仕た後などでは、水夫等にも少量の酒類を與へ、自分等もまた聊か用ゐる。その味はまた君等の知らんところだ。烈しい怖ろしい風、酷い痛い雨、眞黒な天、荒れ立つ水、造物主が其の偉大な働きを見せる大洋の上で、木の葉にも等しい孤舟に立つて、た<sup>二</sup>我が堅確な意志と智識の判斷とのみを我が味方にして、あらゆる試みに耐へて奮進して行つて、終に其の試みに打勝ち果せた時、ラムでもジンでも日本酒でも、一小<sup>二</sup>を手にして自ら稿ふ其の一種の言ふべからざる感じは海員で無くては解らん。陸上の料理屋やなどで飲むのとは全然異ふ味かする。僕はに<sup>二</sup>其様いふ怖ろしい暴風雨の後なんぞに、濕氣拂ひのため、疲勞の回復のために、飲む時ばかりは眞に酒を當するが、其の他の時には左程好まん。もう澤山だ。大分酔つた。』

「然様固くばかりいふな、さあ一盃遣る。見ろ、お濱さんが眼を丸くして、一心に君の暴風雨の談話に聞き惚れて居る、其の罪の無い純潔な様子を見る。此の人が勧める酒を飲まんといふ事があるか。』

水野はこゝに至つて自から微笑を催し、

『羽勝君、まあ一つ過して呉れたまへ。魯敏孫漂流記を讀んで非常に感じて、魯敏孫と一處に棲みたいといったほどの崇拜者となつて居る、航海者好の其人の御酌だら。』

と前の夜の事を思ひ起して語り出づれば、

『あら、よくつてよ先生、餘計な事を。』

とお濱の打消さんとするが如く言へると同時に、日方は笑ましげに、

『何だ、魯敏孫の崇拜者だ、こりやあ面白い。偉い。然様來なくちやならん、其で無くちやいかん。實に愉快な人だ、頼もしい。成程日方が頭を撲られたのも無理は無いは。ハ、君のやうな人になら、もう少々打撲られても關はんは、あゝ而白い。水野猪口を與せ、さあ魯敏孫夫人御酌を願ふ。』

と打興じたり。

されど羽勝は冷然として、た<sup>二</sup>お濱をば一瞥せしのみ、水野に對つて物靜かに、

『海國の口本の事だもの、魯敏孫漂流記に興味を感ずるやうな



女子の出て来て呉れるのは當然の事だ。僕は此席にさへ此様はふ婦人を見る世に、まだ海國の日本の詩にも小説にも、海に關したものと甚だ少いのを遺憾に思ふ。水野<sup>二</sup>。今年中には島木の船を何様しても出す。僕は無論全權を有つて出掛けるのだ。何様だ、君一つ奮發して海上に出んか。決して危険なんぞは有るもので無い。好い機會だ、大洋の美觀壯觀を君の眼に入れんか。茫茫たる大洋の大な景氣の中へ出て、人間の紛々たる葛藤を逃れて、直接に造化の懷中に寢て見んか水野。たしかに君の知らん心持が爲やうぜ。』

と豫て考へ來りしことにやあらん、思ひのほかなる點を沈着いて云ひ出しぬ。

#### 其五十一

水野の答へに答へかぬる時、羽勝はふたゝび言葉をつぎて、

『實は遠洋へ出る漁船などでは、便乗者を特のほかに迷惑がスのだ。しかし君が好むならば僕は勸めても乗せたい。君を大洋の中へ引出したい。いろ／＼の人爲の複雑な組織で、自然の眞趣を蔽ひ盡してゐる陸上から君を離れさせたい。直接に自然の前に出て貰ひたい。直接に自然の詩卷を讀んで見て貰ひたい

僕はよくは詩を知らん。しかし僕が知つて居る自然は、僕の知つて居る一切の詩とは甚だ遠いものだ。僕は自然の或者を解らて居る點に於て詩人に勝つて居るとは信せぬ。た<sup>二</sup>し。海上に關する詩の甚だ淺薄なのは感じて居る。若し詩想のある人が大洋に浮んで、自然の廣大な背景の前で、人間の自から抱く感じを味つたら、在來の詩のやうなものばかりは出來て居まいと思ふ。まあ想つても見たまへ。彼方から此方へ歸る路の、太平洋の眞中あたりで、僕がたゞ一人舷頭に立つて居たことがある。丁座月は眞珠を溶かしたやうな光を投げて一切を包んで居る。其の中を走つて居る自分の船は何處へ行くのだらう。行く先も見えん、來たところも見えん。た<sup>二</sup>淡い光の満ちて居る天水の中を歩いて居る。海は絹毛<sup>二</sup>のやうに滑らかで美しく廣がつて居る。柔かい／＼しかも心の正しい貿易風は、恩愛の溢るゝばかりの慈母の手から出る團扇の風が、睡て居る嬰兒の顔へ當るやうにそより／＼と後から吹いて居る。帆は一ばいに張られたまゝで

パタリとも動かぬ。休番のものは皆■睡して居る。當番のものも、こくり／＼と遣つて居る。一切の用事は皆忘れられて居て、胸の中にも頭の中にも何も無い。何一つ耳に立つ音も爲無い。何も見えん天と水との間を茫然として見て居ると、何時かもう自分の身體も消えて仕舞つて、矢張眞珠の溶けたやうな月の光と一緒になつて、大空の中に流れ瀰つて居るやうな氣がする。左様いふ心持の仕たことがある。其の時の僕の心の中の味とふものは、とても僕の口では云ふ事が出来んが、あゝ若し自分か水野であつたらば、屹度此の美しい何とも云へぬ感じを、■子に現して人に示す事が出来るであらうものをと、深く其の時に僕は思つた。何様だ君一つ海上に出て自然が君に何を與へスカを試みては見ないか。必らず君を益する事は少く無からう。風は風で面白い、暴風雨は暴風雨で面白い。海上の生活も半歳位は宜からう。小な屋根の下から飛び出して見ないか。大熊星の光は北で待つて居る、十字星の光は南で売爾ついて居る。大い／＼此の天地では無いか。米粒に文字を書くやうに、細い■ばかり考へ込まずとも、其の米粒は姑く傍へ置いて、自然の大な景色に親しんで見ないか。何様だい水野、何と思ふ。君が嫌なら仕方は無いが、学校の教師も■よからう、一つ遊んで見れば何様なものだ■。』

と、勉めて水野の意を動かさんと心長く説きたるは、全く心構へして來りしなるべし。

羽勝の意の解せぬ水野ならねば、少からず其の話に情を動か■て、まことに趣味多かるべき海上の生活を試みたきやうの念も起る傍、羽勝が我がために思を費して、かゝる事を勧めくるゝ其意を感じて、嬉しとも忝しとも胸の中には、幾度か感謝■てまた感謝しぬ。

されど水野は今ここに其言に臨はんとも云ひ兼ねて、仰と應んと思ひめぐらすを、見て取りて羽勝は言葉緩く

『何も今君の返辭を求めるのでは無い。船は凡そ十二月に出ナ心算なのだから、それまでは間もある、ゆつくり考へたまへ若し其までに何様な事でもあつて、海へ出たいと思ふやうな事もあつたら、いつでも相談に乗る、悦んで應じる。大洋を■

るのも宜からうと思ふよ。』

と少しも無理強の氣味無く云へば、

『賛成だ、大賛成だ。大洋生活を遣つて見る、水野。女の傍な  
んぞにへばり着いて居ないで、飛び出せ、羽勝と一緒に  
行け、お濱さんでさへ魯敏孫と同棲しやうといふ氣ニが有るぢや無  
いか。』

と日方は却つて強ひ立てり。

天うつ浪第二終

明治三十九年六月十二日印刷

明治三十九年六月十五日ニ行

ニ

ニ作者幸田成

ニ3市日本四四丁五ニ四

發行者和田む

第ニ日本ニ三ニ三ニ町ニ

即刷者金澤求也

東ニ日本得はニ四丁日ニ

發行所春陽堂

電話本局五一番

\*市ヨ本ニ三ニ三ニ町番ニ

印刷所東京印刷株式會社